

実習前の「学校保健」に関する講義受講の教育実習生への影響

—実習中の学校保健活動への意識の違い—

小田 幹子・田野原 佑美・山崎 智子^{*}・川崎 裕美^{*}

児童生徒の健康課題が多様化・深刻化している今日、様々な場面で学校保健活動に関する知識や対応が求められているにもかかわらず、教員の学校保健活動に関する意識不足が指摘されている。また、教育実習中の学生においても学校保健活動に関する知識不足から児童生徒に悪影響を及ぼすことが懸念されている。そこで、筆者らは教育実習中の学生を対象に「学校における事故発生時の対応」をテーマとした学校保健に関する講話を行い、実習前に学校保健に関する講義を受講していた実習生と受講していなかった実習生との意識の差を、実習生の感想文を用いテキストマイニングで分析した。その結果、受講している実習生は講話内容の学校保健活動に対して教員として何をすべきか主体的に考えていたのに対し、受講していない実習生は自らが講話の学校保健活動に携わることがあることに気づき動揺しており、教員の役割認識に留まっていることが明らかとなった。本研究により、教員養成課程において学校保健に関する講義を履修することの重要性が示唆された。

I. はじめに

近年、心の健康問題やアレルギー疾患など児童生徒の健康課題は多様化・深刻化し、教員は様々な場面において学校保健活動に関する知識や対応が求められている。

2008年1月17日の中央教育審議会答申「子どもの心身の健康を守り、安全・安心を確保するために学校全体としての取り組みを進めるための方策について」において、学校保健の組織的活動を活性化するうえで学級担任をはじめとした一般教員による積極的な取り組みが求められた一方、一般教員の学校保健活動に対する理解や主体的に取り組む上での意識不足が指摘された¹⁾。教員の学校保健活動に関する意識不足は、児童生徒の心身の健康へ影響すると考えられ、早期の意識改革が求められる。また、教育職員免許状を取得するための教育実習においても、学生が学校保健活動に関する知識や構えを持たずに実習に臨み、児童生徒の健康面への配慮や緊急の事故への対応が不十分なことで悪影響を及ぼすことが論じられている²⁾³⁾。

現職の教員を対象としたアンケート調査では、『教員として勤務しはじめた際に学校保健の知識・技能をもっと知っておいた方がよかったと思った場面』は、「クラスに持病やアレルギーを持つ児童生徒がいるとき」「怪我の応急処置のとき」と健康に課題のある児童生徒に個別に関わる時が最も高かった⁴⁾。また、『学校保健について学ぶ機会』については68.1%が「必修として、大学で学ぶのがよい」と回答しており、現職教員の大学在

学中における学校保健に関する講義の受講経験の必要性の認識が明らかとなっている⁴⁾。しかし、教育職員免許法及び教育職員免許法施行規則では、学校保健が必修科目とされているのは中学校・高等学校の保健体育科または保健科、養護教諭の免許状の授与を受ける場合のみである。今後、全ての教育職員免許状取得者が受講する必然性を具体的に示すためには、検証が必要と考える。そこで、筆者らは教育実習前に学校保健に関する講義を受講したかどうかによる、教育実習中に行った講話後の学校保健活動に対する実習生の意識の違いを検討した。

II. 研究方法

1. 対象者

対象はH大学に所属する3年次課程、F中・高等学校に配属された実習Iの実習生である。2016年度は149人、2017年度は137人である。

2. 調査時期

教育実習は8月末から全9日間の日程で行われている。2016年度は実習開始後4日目、2017年度は実習開始後5日目に調査を実施した。

3. 講話内容

2016年度、2017年度とも同じ養護教諭が同じ教材を使用し「学校における事故発生時の対応」というテーマに

※広島大学医歯薬保健学研究所

において、50 分の講話を行った。講話の主な内容は以下のように行った。

- (1) 応急手当における教員の役割及びその法的根拠の説明 (戸田芳雄:学校・子どもの安全と危機管理, 2012)
- (2) 学校内における事故発生時の教員の動きについて (①傷病者の発見, ②緊急性の判断, ③他の教員への応援要請, ④傷病者への応急手当の実施, ⑤管理職への報告, ⑥救急車要請のポイント, ⑦保護者への連絡) 説明
- (3) 食物アレルギーについて説明し DVD を視聴 (文部科学省・公益財団法人日本学校保健会: 学校におけるアレルギー疾患対応資料)
- (4) シミュレーションとして学校内でエピペンを所有する生徒のアナフィラキシーショック発生時の対応を, ランダムに指名された代表の実習生が実演
- (5) 実演した実習生の動きから, 事故発生時の対応について振り返り, 養護教諭からのフィードバック

4. 調査内容

講話終了後, 学校保健に関する講義の受講の有無, 自由記述の感想文を記入するよう説明した。学校保健の定義については, 文部科学省のホームページに掲載されている定義(http://www.mext.go.jp/a_menu/kenko/hoken/index.htm 2016 年 8 月 26 日にアクセス)を使用し, 定義にあてはまる講義の受講の有無を尋ねた。感想文には具体的にどのような内容を記述するか教示しなかった。

5. 分析方法

自由記述である感想文についてはフリーのテキストマイニングソフトウェア KH Coder (樋口 <http://khc.sourceforge.net/2014> 参照) を用いデータ分析を行った。

分析は以下のように行った。

- (1) 学校保健に関する講義の受講の有無及び感想文どちらかに未記入事項がある実習生は分析の対象から除外した。その結果 2016 年度は 137 人が, 2017 年度は 134 人が分析の対象となった。
- (2) 対象となった実習生が記載した感想文を Excel に入力し, テキスト化した。
- (3) 主観の排除を行うため, 表記上の誤り及び類義語の処理は行っていない。
- (4) 多くの文書に存在する助詞・助動詞・否定助動詞は分析の対象外とした。
- (5) 学校保健に関する講義の受講がある実習生を「受講あり群」, そうでない実習生を「受講なし群」とした。
- (6) 「受講あり群」と「受講なし群」の特徴語を分析するため, それぞれ形態素解析を行った。また, 形態素解析で得られた登場回数上位 25 位の登場

語について両群の記述人数に有意差がみられるか分析するため, 群別の χ^2 検定を行った。統計の処理については Excel を用い, 統計上の有意水準は 5%とした。

- (7) 共起ネットワーク分析において, 「受講あり群」と「受講なし群」の人数差による総語数の差を補うため, 「受講あり群」は出現回数 15 回以上の語で, 「受講なし群」は出現回数 40 回以上の語で分析を行った。Jaccard 係数は, 0.1 以上に設定し, サブグラフ検出で共起ネットワークを作成した。

6. 倫理的配慮

本研究は出欠の確認を含めているため, 記名式であった。そのため, 調査対象者に対して, 研究の趣旨, 目的を説明し, 研究への参加は自由意思であること, 得られたデータは個人を特定できないように取り扱うこと, 研究以外の目的では使用しないこと, 研究成果の公表にあたってはプライバシーを厳守し個人が特定されるような形での公表を行わないことを保障することを文書と口頭で説明し, 同意が得られた実習生のみを分析対象とした。

Ⅲ. 結果

1. 回収率及び有効回答数

回収率は 2016 年度及び 2017 年度ともに 100%であった。学校保健に関する講義の受講の有無及び感想文の記述がある実習生, 研究に同意をしている実習生を分析対象としたため, 有効回答数は 2016 年度 137 人 (91.9%), 2017 年度は 134 人 (97.8%) であり, 合計 271 人である。

2. 学校保健に関する講義の受講の有無

表 1 には, 学校保健に関する講義の受講の有無について年度別に示した。2016 年度の受講した者は 34 人であり, そのうち必修科目者は 16 人であった。2017 年度の受講した者は 40 人であり, そのうち必修科目者は 13 人であった。そのため, 合計で「受講あり群」の実習生は 74 人, 「受講なし群」の実習生は 197 人であった。

表 1 学校保健に関する講義の受講の有無 (人)

	2016	2017	合計
受講あり群	34	40	74
受講なし群	103	94	197

3. 特徴語分析

(1) 形態素解析

表 2 には, 実習生の感想文の形態素解析を行い, 受講

あり群と受講なし群の実習生別に登場回数上位 25 位までの語とその記述人数を示した。総語数は受講あり群は 3,245 語、受講なし群は 8,636 語である。網掛けはどちらの群にも上位 25 位までに登場する語であることを表している。また、上位 25 位以内に登場した語のうち、もう片方の群で 25 位以内に入っていなかった語は表内に順位を記載せず登場回数と記述人数を示した。

(2) 登場語の群別 χ^2 検定

表 3 には、表 2 の登場語の記述人数について群別に χ^2 検定を行い、5%水準で有意差があった結果のみを示した。その結果有意差があった登場語は「応急」「手当」「シミュレーション」であり、いずれも受講なし群に有意に多かった。また、表 3 の 3 単語についてのクロス集計表を表 4, 5, 6 に示す。

表 2 群別の形態素解析結果 (※登場回数が同じ語は五十音順に順位づけ)

順位	受講あり群			受講なし群		
	登場語	登場回数	記述人数	登場語	登場回数	記述人数
1	思う	98	55	思う	274	148
2	生徒	67	42	生徒	168	109
3	知る	66	35	対応	164	96
4	対応	63	43	知る	154	94
5	教師	52	34	アレルギー	132	100
6	アレルギー	45	31	応急	132	92
7	学校	42	30	教師	124	87
8	応急	35	24	学校	110	82
9	緊急	31	22	自分	95	75
10	必要	31	22	必要	89	65
11	事故	30	19	手当	83	80
12	実際	28	22	実際	81	71
13	分かる	28	21	今回	75	58
14	自分	27	22	学ぶ	74	59
15	今回	26	23	感じる	74	61
16	聞く	26	22	事故	72	52
17	起こる	25	18	食物	72	63
18	感じる	25	19	対処	65	50
19	初めて	25	20	分かる	64	53
20	学ぶ	24	15	緊急	63	56
21	講話	24	21	講話	60	49
22	食物	21	19	知識	58	43
23	手当	20	19	行う	52	40
24	保健	19	15	シミュレーション	48	47
25	行動	17	16	症状	48	39
	対処	16	13	聞く	39	37
	知識	16	14	起こる	38	33
	行う	15	14	初めて	43	39
	シミュレーション	8	7	保健	38	31
	症状	14	13	行動	38	35

あったためと考えられる。

感想文中の登場回数上位の登場語において、記述人数に有意差がみられた特徴語は「応急」「手当」「シミュレーション」であり、いずれも受講なし群に有意に多かった。「応急」「手当」は事故発生時の対応における応急手当に関する記述と考えられた。また、「シミュレーション」は共起ネットワーク分析において「アレルギー」と共起しており、講話内における食物アレルギーのある生徒への対応のシミュレーションについての記述と考えられた。まず、「応急」「手当」の2つの語について原文に遡ったところ以下のような文章がみられた。

- ①「AEDのあつかい方や、応急手当のやり方は、5回ぐらい聞いた話なので、教師も応急手当をできるようにならないといけないことは理解できた。(受講あり群)」
- ②「応急手当の方法は、今まで何回かやったことがありますが、アレルギーに対する対応をしたのは初めてだったので、とても新鮮でした。(受講あり群)」
- ③「正直に言うと、これまで応急手当などの知識や技能を取習する機会というのはあまりありませんでした。(受講なし群)」
- ④「学校での応急手当は保健室で行うというイメージがあったため、応急手当は自動車学校で習ったこと程度しか知らない。(受講なし群)」

受講あり群の実習生は応急手当について複数回学習機会があったと記述していたのに対し、受講なし群の実習生は応急手当について学習する機会があまりなかったとしていた。このことから、講話で一般教員の応急手当を行う必要性について学習したことが、受講あり群の実習生と比べ応急手当の学習機会の少なかった受講なし群の実習生にとって印象的であり記述に影響したと考えられた。また、応急手当に関する学習機会の差によって引き起こされた記述の影響は他箇所でもみとめられた。共起ネットワーク図では、「エピペン」は受講あり群では「初めて」「知る」「AED」「聞く」と共起しており、受講なし群では「初めて」「知る」と共起していた。これは、「エピペン」について受講なし群は未習であったと記述した実習生が多かったのに対し、受講あり群では未習に加え既習内容のAEDを関連付け記述した実習生が多かったと考えられた。

「シミュレーション」については、沖津らは教育実習で<健康課題のある児童に直面して動揺する>ことで、<健康課題のある児童の対応に試行錯誤する>過程を経て、<学校における健康課題のある児童への取り組みを認識する>中、役割を全うしようとする自覚や責任感が

芽生える<健康課題のある児童の対応における担任の役割を自覚する>という意識変容のプロセスを明らかにしている⁵⁾。つまり、受講なし群の実習生にとって初めて学習する今回の講話は<健康課題のある児童に直面して動揺する>という最初の段階であり、アレルギーのある生徒への対応というシミュレーションによって引き起こされた動揺が受講あり群の実習生と比較して大きく、記述につながったと考えられる。この動揺は以下の原文からも考えられ、受講あり群ではシミュレーションを肯定的に捉えていたのに対し、受講なし群では不安感を訴える実習生が存在している。

- ①「今回、エピペンについてのシミュレーションもとても分かりやすく、良い学習になった。(受講あり群)」
- ②「アナフィラキシーショックになると死にいたるといふ実は注意深くしておく必要がある事であることが分かり、またそれに対する処置の方法をシミュレーションによって説明していただいたので頭に入りやすかったです。(受講あり群)」
- ③「エピペンをどのように用いたらよいのか何かの生徒によってシミュレーションをしてもらいましたが、いざ実際に自分がそのような場面に遭遇したときちゃんと対応できるか心配です。(受講なし群)」
- ④「前でやっていたシミュレーションはわかりやすかったが、実際に自分ができるかどうか不安であった。(受講なし群)」

次に、登場語の記述人数について有意差がでなかった単語について、共起ネットワーク図から原文に遡り分析を行った。分析にあたり、本研究の対象者は教育職員免許状取得を控えた教育実習生であることをふまえ「教師」という単語と、講話のテーマ「学校における事故発生時の対応」をふまえ「学校」という単語に共起ネットワーク図で着目した。まず、「教師」は受講あり群では「起こる」「分かる」と共起しており、受講なし群では「生徒」「感じる」と共起していた。この共起関係は原文に遡ったところ、以下のような文章がみられた。

- ①「日常生活で起こる病気やけがへの対処は周りの教師が主体的に行っていかなければいけないことが分かった。(受講あり群)」
- ②「自分自身が教師という立場になったときに、”起こり得る”と思って過ごしていかなければならないと考えさせられた。(受講あり群)」
- ③「教師は教科指導や生徒指導のみならず、生徒たちの安全を守る役目があるのだと、改めて勉強になりました。(受講なし群)」

- ④「生徒に勉強を教えるのが教師の役割だと思っていたので、それだけではないのだ、ということを知ることが出来ました。(受講なし群)」

原文を比較したところ、受講あり群は「主体的に行っていかなければいけない」「起こり得ると思って過ごしていかなければならない」など自らが教員という立場になった時の責任感の芽生えが伺えるが、受講なし群は「生徒たちの安全を守る役目」「生徒に勉強を教えるのが教師の役割だと思っていた」など役割認識に留まっていると考えられた。

次に、「学校」は受講あり群では「緊急」「対応」と共起しており、受講なし群では「講話」「分かる」と共起していた。この共起関係は原文に遡ったところ、以下のような文章がみられた。

- ①「学校だけでなく、日常生活においてもしっかりできることはあると思うので、緊急時に備えて、しっかり心構えをしていこうと思った。(受講あり群)」
- ②「保健室の先生だけでなく、学校の教師全員が生徒の応急手当に対応できるよう、普段から生徒の命を預かっているのだから責任を意識する必要があると思った。(受講あり群)」
- ③「学校にAEDがあるのは知っていたが、エピペンという薬はもちろん、使い方など聞いたこともなかったので、今回の講話は大変役立ちました。(受講なし群)」
- ④「緊急時の応急手当は自動車学校で学習したことがあるが、それは自動車事故が起きたときの場合に限られたため、学校で緊急事態が発生した時にどのように対処すれば良いのかについては、今回の講話で初めて学習した。(受講なし群)」

原文を比較したところ、受講あり群は“講話から何を考えたり感じたりしたか”を記述しているのに対し、受講なし群では“講話内容を理解した”ことの記述に留まっていた。以上のように「教師」「学校」どちらの単語の原文比較でも、受講なし群の実習生は講話の学校保健活動に対する理解に留まっているのに対し、受講あり群の実習生は講話の学校保健活動に主体的に取り組む意識がみられた。沖津は、先に述べた健康に課題のある児童の対応の意識変容のプロセスに影響を及ぼす要因の1つに、教育実習生の“児童の健康課題に取り組むための予備知識”をあげている⁵⁾。本研究においては学校保健に関する講義の受講者の方が予備知識を多く持っていたと考えられ、これが同講話受講後の意識の差を引き起こしたと考えた。

以上のことから、実習前の学校保健に関する講義の受

講あり群となし群とでは、実習中に同講話を受講した直後において、学習した学校保健活動への取り組みの意識に違いがあることが明らかとなった。そのため、学校保健の組織的活動の活性化や教員の学校保健活動の積極的な取り組みが求められる今日、教員が学校保健活動に主体的に参加する意識を育てるために、学生の大学在学中における学校保健に関する講義の受講経験は必須であると考えられる。

V. おわりに

本研究は、実習前の学校保健に関する受講の有無によって、実習中に学校保健に関する講話を受けた実習生の講話後の意識に違いがあるか明らかにするため分析を行った。その結果、受講していない実習生は講話後に事故発生時の教員の役割を認識するに留まっており、自らが健康に課題のある生徒に対応する場合もあることに動揺している段階であると考えられた。しかし、受講している実習生は学校における事故に対応するため自らは何をすべきか行動を主体的に考えるなど講話内容を肯定的に受け止めていると考えられ、意識の違いが明らかとなった。そのため、現在課題となっている学校保健に関する知識がない教育実習生によってもたらされる児童生徒の心身の健康への影響、一般教員の学校保健活動に対する理解や主体的に取り組む上での意識不足を改善していくためには、教員養成課程で学校保健に関する講義を受講することが有効であると考えられる。

VI. 限界と課題

本研究の課題として以下の4点が挙げられる。第1に、対象が1校のみであり、2016年度及び2017年度のみでの調査であったことから、この大学・実習生の特性が調査結果に影響した可能性がある。第2に、記名式であったため教員の閲覧を意識した感想文となっており、本来の実態とは異なる可能性がある。第3に学校保健活動の一部を取り上げた講話内容であり、他のテーマの講話で同様の傾向の結果がでるとは限らない。第4に、必修科目でないにも関わらず学校保健に関する講義を受講している実習生は、もともと学校保健活動への意識が高いことも考えられ、単純に受講によって本研究の結果が現れたとは限らない。以上のような課題があるため、本研究を一般化するには限界がある。そのため、今後は講話テーマが異なっても同様の研究結果が得られるか、学校保健活動に関するどのような知識が実習生の学校保健活動への意識の差を生じさせるのか検証する必要がある。

Ⅶ. 参考文献

- 1) 中央教育審議会：「子どもの心身の健康を守り，安全・安心を確保するために学校全体として取り組みを進めるための方策について」（答申）
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo5/08012506/001.pdf（2017年11月16日にアクセス）
- 2) 東京学芸大学附属学校合同研究会学校保健部会：教育実習生の実態と学校保健の指導のあり方～養護教諭の立場から～，155-156，1999
- 3) 紙川未央ほか：教育実習における附属学校園養護教諭の取組—学校保健活動を遂行する教員を養成するために—，岡山大学教師教育開発センター紀要 第5号 別冊 129，2015
- 4) 荒川響子ほか：学生への学校保健の指導の充実を目指し—養護教諭の立場から—，日本教育大学教会養護教諭部・全国国立大学附属学校連盟養護教諭部会研究収録 第50号 43-45 2015
- 5) 沖津奈緒，朝倉隆司：健康課題のある児童の対応における教育実習生の意識変容プロセスと影響要因に関する質的研究，54-59，2015